

四部三十三甲十一

舊山臺蕭士 大聯文奇藝精

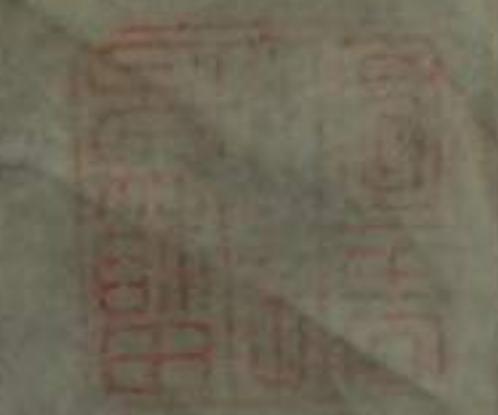
おのづかしに思ひ、丁度おもてなしの事、言ひ缺くの姿」を奉  
さうに續ふ譲りア、改々實燒の寺廟をもとめへ丁、御隠歎を猶めらる事、言ひ缺くの姿」を奉  
の透曉せむことを要へ丁、走卒十日、墓壇を題せられ、又うの由謙コさるをす、原初の節目は  
萬葉集の千葉丸山墓壇の事なり、吾故大體丸山實ノ落西丸の支那事なり、因テ西道音の事也  
此多盡らひア、實ノ當告中興の事也。

天台宗  
妙慈山  
山西米  
寺額  
釋味

大藏園南葛禮酒木田林大宇嘉



A color calibration chart featuring a grid of colored squares used for printing and color matching. The colors are arranged in a repeating pattern: Magenta, Yellow, Cyan, Green, Blue, Red, White, and Black. The chart also includes registration marks labeled 'A' and 'B' at the bottom, and numbers 1 through 19 along the right edge.



武藏國南葛飾郡本田村大字滝江

## 天台宗 超越山西光寺略縁起

當寺開基葛西三郎平清重入道西光御坊は、桓武天皇の皇子葛原親王の曾孫鎮守府將軍平良文より七代の裔にて、下總の葛西の地に住して、千町歩を領せられしと傳ふ。是れ、今の武州南葛飾郡の地にて、當寺は、即ち、清重君が居館の地なり、源平盛衰記に、治承四年、賴朝卿、下總より出で、隅田河原に陣を取られし時、清重君、一族をひきみて參着し、浮橋を造て、軍勢を渡されし由見え、又此年、賴朝卿、常陸より鎌倉へ歸らるゝ時、十一月十日、以武藏國丸子庄賜葛西三郎清重、今夜、御止宿彼宅、清重令妻女備御膳云々、吾妻鏡に見ゆるは、當寺にありし居館の事と思はる、同書に、又、文治五年、賴朝卿の奥州征伐に從て、軍功ありしかば、奥州にて數郡の地を賜はり、留て奥州を鎮撫せしめらるゝ見え、十月二十六日、自奥州御還向之處葛西三郎清重母、所勞之由、於路次被聞召之間、遣御使於葛西住所令訪之給、彼使者、今日參着于鎌倉、所勞無指危急事云々、こも見ゆ、ここに葛西住所あるも、當寺居館の事覚ゆ、此後、多くは鎌倉にありて、賴朝卿が出入に、隨從せず、いふこそなし、建久元年、從て上洛し、右兵衛尉に任せられ、後に壹岐守從五位下になされたり、凡そ、賴朝、賴家、實朝、三代の將軍に仕へて、生涯の軍功、數ふるに暇あらず、寺傳には葛西の領地、次第に加増ありて、都合三千五百町歩に及へりこあり、南葛飾郡の村々の、當寺開基に縁深き事知るべし、清重君、晩年に削髪して、壹岐入道と稱せられ、子孫は、奥州に移て住せり、寺傳に又云、親鸞上人關東遊化の時、清重君が葛西の居館に杖を留む、逗留の間に、清重君、發心して、上人の弟子となり、法名を西光とつけられ、滅後、居館を寺とす、當寺是れなり、云々、開基入滅の年、詳ならざれど、仙臺藩葛西家の過去帳に、承久三年辛巳、九月十四日、七十四歳、とあれば暫くこれに從てあるべし、當寺に、親鸞上人真筆の眞面彌陀如來の畫幅あり、逗留の間の作なりと云、又、西光御坊の自刻の聖徳太子の木像ありて、その腹籠の彌陀の木像も、上人の直作と傳ふ、其外、西光御坊の坐像、并に所持の長刀もあり、開基の墓は、本堂より西南なる畑中にある、往時は、上に社ありて、清重稻荷と稱せしを、明治の後に至て、取拂はれしに、去年七月、再び舊趾に墓表を設けて、永くそのあることをさゝむる事とはしたり、當寺、嘉祿元年の草創より、今年まで、六百七十六年、開基より現住まで、五十六世、法脈連綿として絶えたる事なし、に力を盡されて、實に當寺中興の功あり、

葛西家の子孫は、仙臺藩に存せり、吾が大槻氏も、實に葛西氏の支流なり、因て清重君の墓地の湮滅せむことを憂へて、去年七月、墓表を設けたり、又その由緒にちなみて、現住の請はるに辭み難くて、乃ち、實錄に寺傳をもまじへて、略縁起を綴れる事、右の如し、その委しき事は、別に記して寺藏にあり、

明治三十三年十一月

舊仙臺藩士 大槻文彦謹記